

【七月の言葉（令和七年）】

自分の弱さを抱えて生きる

「悲しきかな愚禿^{ぐとくらん}、愛欲の広海に沈没し、名利^{みょうり}の太山に

迷惑^{じょうじゆ}して定聚の数に入ること喜ばず、真証^{さとり}の証に近づ

くことを快^{たの}しまざることを恥^{いた}ずべし傷むべしと」（教行信証）

「悲しいことに、愚かな私、親鸞は、果てしなく広い愛欲の海に沈み、名声や利益を貪^{むさぼ}るような欲望の山に迷い込み、浄土へ往生できる身になったことを喜ばず、悟りに近づくことをも、うれしいと思わない。恥^{はづかし}かく、心が痛むことだ。」

親鸞は自身のことを愚禿と名乗り、様々な言葉で偽りのない自分の内面を語っていました。私たちは何かといえば、自分の弱さから目をそらし、他人の短所を指摘しがちです。しかし、自分の内面をよく観察すると多くの至らなさを発見するはずで、それらを自覚すれば、本当に大切なことは何かが見えてくるはずです。（「くり返し読みたい親鸞」〈リベラル社〉より）

※愚禿＝頭を剃った愚か者（僧が自分をへりくだっている語）